

増養殖技術開発事業 (アワビの放流技術)

勢村 均・曾田一志

前年度に引き続き、アワビの標識放流、短期追跡調査を実施した。今年度は、メガイアワビの1歳貝と当歳貝を用いて、前年の追跡結果の再現性を確認した。

方 法

放流場所は、島根町多古地区の通称タルミとした。平成9年6月12日に、水深3～4mの岩盤区に、栽培漁業センターで平成7年採卵されたメガイアワビ(1歳貝、黄標識)の平均殻長 42.6 ± 2.78 mmの個体248個体と、平成8年採卵されたメガイアワビ(当歳貝、紫標識)の平均殻長 27.6 ± 1.34 mmの個体298個体を放流した。

結果および考察

発見率は、放流後18日目では1歳貝群が25.4%、当歳貝群が15.8%と1歳貝群の発見率が高かった。(図1)。死殻回収率も、1歳貝群が6.5%、当歳貝群が1.7%と1歳貝群が高かった。放流後42日目の発見率は、1歳貝群が18.1%、当歳貝群が15.1%と1歳貝群が高かったが、18日目の発見率と比較すると、1歳貝群の減少割合が大きかった。累積死殻回収率は、1歳貝群が14.5%、当歳貝群が4%と1歳貝群が高く、18日目の回収率と比較すると、1歳貝群の増加割合が大きかった。放流後109日目の発見率は、1歳貝群が8.1%、当歳貝群が7.7%とほぼ同様な割合となった。累積死殻回収率は、1歳貝群が17.7%、当歳貝群が5.7%と1歳貝群が高く、42日目からの増加割合もやや大きかった。すなわち、発見率は、放流当初は1歳貝群のほうが高いが、次第に両群の値がほぼ同様になった。また、死殻回収率は、放流後常に1歳貝群のほうが高かった。

以上の結果を昨年度の調査と比較すると、1歳貝群と当歳貝群の放流後の発見率および累積死殻回収率は、両群の発見率の低下割合が昨年よりやや大きく、当歳貝群の累積死殻回収率がやや高かったものの、推移は同様な傾向であった。

今年度も昨年度とほぼ同様な調査結果が得られたことから、昨年度の調査結果の再現性が確認されたと考えられる。また、調査結果の解釈としては、1歳貝群と当歳貝群の累積死殻回収率を比較すると、当歳貝群の回収率が著しく低かった理由として、生貝の発見率はこの逆の傾向であることから、当歳貝群のほうが1歳貝群より分散度合いが高かったためと考えた。さらに、当歳貝の殻は1歳貝より小さいので発見しにくいことを考慮しても、回収率が著しく低いのは、放流当初の斃死が1歳貝群より少なかったためと考えた。

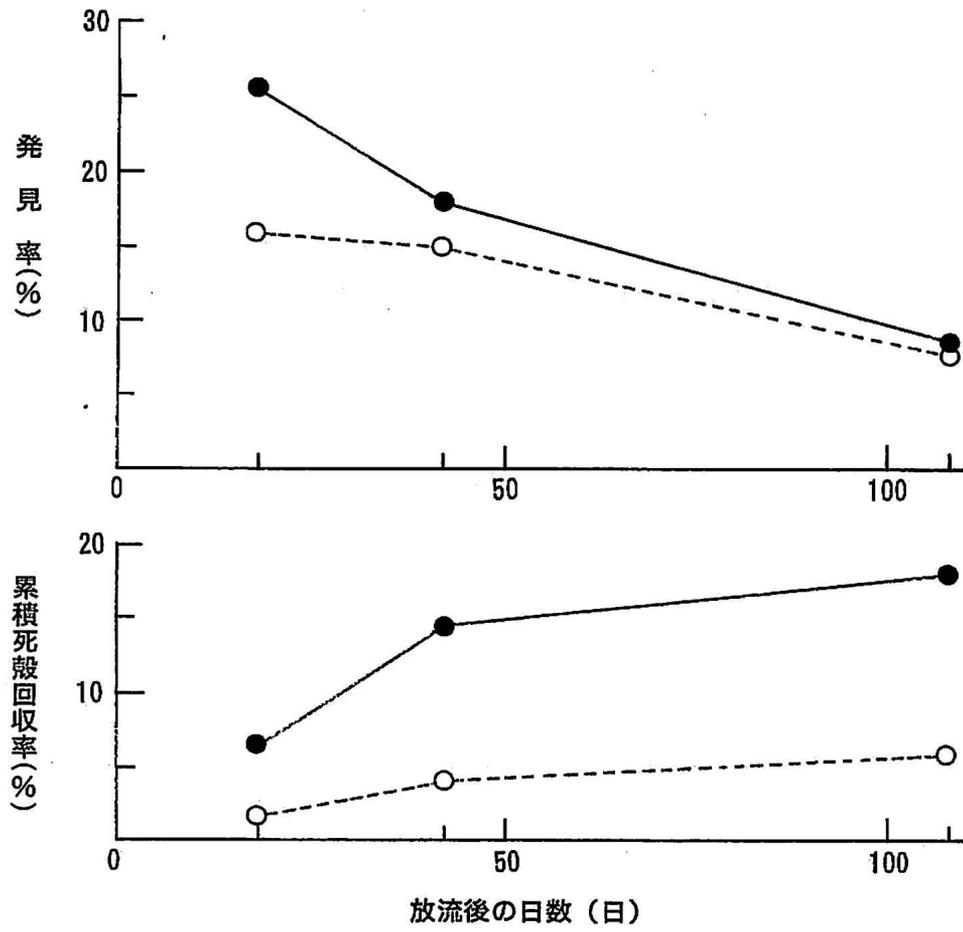


図1 メガイアワビ1才貝(黒丸)と当才貝(白丸)の放流後の発見率と死殻回収率